

# 受刑者たちが開いた「大津街道」

地域産業

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展 今、そして未来へ

用語

さくいん



明治29年(1896)発行の地形図。(国土地理院所蔵の1/5万地形図(帯広・止若)を使用。大津街道に茶色く着色)



平成9年(1997)発行の地形図。赤い点線が大津街道だったところ。写真は、国道38号と旧大津街道の交差点(幕別町札内中央町)。(地図は、国土地理院刊行の1/5万地形図(帯広・十勝池田)を使用)

明治時代の前半までは、海岸ぞいを除いて、十勝に整備された広い道はほとんどありませんでした。

明治25年(1892)、北海道集治監(今の刑務所)釧路分監(支所)の受刑者700人がやって来ました。

彼らは十勝川ぞい5ヵ所に分かれ、大津(豊頃町)から芽室を結ぶ「大津街道」を開きました。2年でおおよそ70kmの道を切り開いたのです。

大津街道ができて、まだまだ十勝川を使った川舟が交通輸送の中心でした。しかし、街道の通行にはお金がかからず、十勝内陸をめざす開拓者や舟着き場まで農産物を運ぶ人たちにとって、大きな意味を持ちました。

## 今も生きる大津街道

大津街道は少しルートを変え、改良されながら、今でも重要な道となっています。

芽室坂(あけのまきべつ)と明野(あけの)の間、茂岩(もいわ)と大津(とよころ)の間の国道38号、札内(さつない)と猿別(さるべつ)をつなぐ道道503号(明倫幕別(めいりんまくべつ)停車場線)、それに、茂岩(もいわ) - 大津(とよころ)をつなぐ道道320号(旅来豊頃線(りきよとよころせん))と911号(大津旅来線(とよころりきよせん))がそれにあたります。

道路工事を終えた受刑者たちは、次に「十勝分監(刑務所支所)」を、今の緑ヶ丘公園周辺(帯広市)につくります。

明治28年(1895)、十勝分監(8年後に十勝監獄)ができあがりました。

## 農地を開き、鉄道をつくる

監獄の受刑者たちは、帯広に農地を開きます。また、監獄で作られる、日用品、農機具、建具などさまざまなものが、十勝に移住してきた人たちの生活を支えました。十勝石(黒曜石: p33・p75)の細工も、ここが始まりです。また、それらをつかう商人や監獄関係者が住むことで、帯広市街が発展していきます。十勝監獄の受刑者たちは、今でいう帯広市の大通りにあたる道や糠平(上土幌町)へぬける道などの道路工事をおこなったほか、裁判所や十勝公会堂や学校など、さまざまな建物を建て、鉄道づくりや河川工事でも活やくしました。ただし、そのあつかいはきびしく、作業などで死んだ人も少なくはありません。



(上) 今も残る十勝監獄の石油庫。(帯広市緑ヶ丘公園)



(右) 受刑者が作った、十勝石製のカエルの置物。(帯広百年記念館蔵: 4)

1 受刑者(じゅけいしや): 犯罪をおかし、裁判の結果、刑務所(けいむしょ)に入れて自由をうばわれた人。北海道の集治館(しゅうじかん: 刑務所)には罪の重い人が入れられた。政治犯(政府にはげしく反対した人)も入れられた。

2 大津街道(おおつかいどう): そのほか、猿別-明野(幕別町)の間は曙通(あけぼのどおり)にあたる。  
3 十勝分監(とちかぶんかん): 正式には「北海道集治監十勝分監(ほっかいどうしゅ

## 木材は音更川が運ぶ ... 木材の流送

十勝分監（十勝監獄）をつくるための材料は、音更川をさかのぼった糠平（上士幌町）あたりの山で木材を切って、手に入れました。この木材は、音更川の流れに乗せて、今の木野市街（音更町）あたりまで流されました（流送という p180）。

引き上げられた木材は、少し加工されてから十勝川を舟でわたり、「木のレール」を走るトロッコで、今の緑ヶ丘（帯広市）まで運ばれました。

分監（監獄）ができたあとには、帯広周辺のさまざまな建物をつくるための材料が、同じように運ばれました。

大正時代には、製紙用の木材を切り出した業者のもとで、受刑者たちは糠平（上士幌町）に通じる道をつけます。非常に危険な工事でした。

開通後、十勝監獄は「音更山道碑」という石碑を建てました。国道273号ぞいに復元され、今も見るができます。



音更山道碑。上士幌町字黒石平。屏風岩の近く。



音更川の流れと、十勝監獄で木を切っていたところ(□)。(地図の川や市町村は今のもの)



夏の音更川、糠平ダム下流（上士幌町糠平）



秋の音更川、萩ヶ岡橋上流・セタ川合流点付近（上士幌町萩ヶ岡）



音更川、十勝新橋上流（音更町木野・宝来）。今の木野東小あたりで木材を引きあげた。

## 赤い着物の受刑者たち ... 受刑者が建てた小学校

十勝分監（十勝監獄）の受刑者たちは、明治29年（1897）には帯広尋常小学校（帯広小学校）を建てています。帯広だけではありません。

平成7年（1995）に閉校した青山小学校（池田町）の始まりは、明治35年（1902）にできた下利別簡易教育所でした。明治39年（1906）に、下利別尋常小学校になります。周囲が発展するにしたがって生徒の数が増え、校舎がせまくなったため、新しい校舎が建てられることになりました。

当時、子どもだった人の思い出です。「私が六歳の時、赤い着物を着た人が大勢ならんで私の家の方に来たので、私は驚いて家へ飛びこんで祖母にしがみついたことをおぼえている。

祖母の話によると帯広の十勝監獄の囚人（受刑者）が新しい学校を建てに来ているのだと言った。夏の暑い日だったので川に汗を流しにつれてこられたのだ。（中略）

その当時としては実にりっぱな学校だったにちがいない。教室は二つ、職員室と昇降口をかねて物置もあった」（藤山諭さんの話。『開校六十周年記念誌』1961より。「池田町開拓夜話」）

こうして明治41年（1908）に新しい下利別尋常小学校ができました。

十勝の開拓、そして発展には、開拓者たちの努力のほか、重罪人としてつかまり、刑を受けていた監獄受刑者たちの力も大きかったのです。

うじかんとかちぶんかん」。集館とは、おもに重罪人や激しく政府に反対した人を集めた刑務所（けいむしょ）。きびしく働かされ、命を失う受刑者も多かった。

4 帯広百年記念館（おびひろひやくねんきねんかん）：帯広市緑ヶ丘2 電話：0155-24-5352

第1章 十勝の平野や川ができるまで  
第2章 先史時代と川  
第3章 アイヌ文化と川  
第4章 十勝開拓と川  
第5章 発展、そして未来へ

用語  
さくいん